トリプルお姫さまがメイドになってご奉仕ウォーズ

小説 筆祭競介
挿絵 皐月みすず

立ち読み版

序　章　ご主人さまと三人の姫メイド　006
第一章　押しかけトリプルプリンセス　015
第二章　高飛車姫の夜のフルコース　041
第三章　お姉ちゃん姫の裸エプロン　085
第四章　姫剣士に告白されて……　137
第五章　トリプル姫メイドのご奉仕ウォーズ　182
終　章　ハーレムエンドだと思ったら、そうはいかなくなった件　251

登場人物紹介

Characters

ランジェリカ

南の隣国ハルモニアの姫。おっとりとした性格で、アルのお姉さん的な存在である。幼い頃からアルとは交流がある幼馴染みで、結婚の約束を交わしたことも。

ローザリンデ

同盟国であるリュクスの姫。高飛車な性格であるものの、お姫さまとしての教養は抜群。以前、アルがリュクスに留学していた時に、彼のことを好きになった。

クラリス

小国ソレーネの姫。武芸に秀でたお姫さまで、先の戦時にはいち早く駆けつけ、最前線で武勇を振るったという噂である。政略結婚のため、アルとの結婚を狙う。

アルベール

三国のお姫さまから同時に求婚を受けたシャトライト王国の王子。通称「アル」。

服を着ていないために、そのバストの桁外れな豊かさは隠しようがない。
昨夜直にこの目で見たローザもかなりのサイズだったし、クラリスだって相当大きい。
しかしバストサイズの純粋比較では、やはりランが一番だ。
（すっごく柔らかくって、気持ちいいんだろうなぁ……って――ま、まずい！）
その触り心地を想像しただけで、若い股間が熱く充血してきてしまう。
「アルぅ？　これは何かなぁ？」
それに気づいた幼馴染みの表情が、ますます険しさを増していく。
「ご、ごめんなさい！」
「ローザちゃんとのことを思い出して、こんな風になるなんて許せないよ！」
「……ふぇっ？」
しかしランは勃起理由を全く違う意味に取り、怒っているようだ。
アルは慌てて顔を左右にブンブンと振りまくる。
「ち、違う違う！　こうなったのは、そーじゃなくって……そ、その……」
しかしさすがにその理由を口にするのは気恥ずかしくて、どうしても躊躇ってしまう。
が、ランの今にも悔し泣きしそうな顔を見せられて、慌てて続きを口にした。
「ラン姉さんの、その大きな胸を見たから、こうなっちゃったの！」
ずっと怒っていた幼馴染みの美貌がキョトンとなる。

そして真っ赤になっているアルの視線を辿るようにして、己の豊かすぎる胸元を見た。
「……あは♡」
ランの美貌にいつもの優しさと悪戯っぽさを併せ持つ、ふわっとしたお姉ちゃんスマイルが初めて浮かぶ。
「も～～♡　そんなにお姉ちゃんのおっぱいが好きなのぉ？」
「そ、そんなのしょうがないよぉ。ぼ、僕だって男なんだから……」
むしろランの裸エプロン姿を見せられて、こうならない男の方がどうかしている。
しかし年上メイドは、からかい交じりの笑みを浮かべつつ、追求の手を緩めない。
「ん？　なあに？　男だとなんなのぉ？」
と甘く言いながら、こちらの頬をツンツンと突いてくる。
「だ、だからそれは……」
「ちゃんと言ってくれないとぉ、お姉ちゃん、わかんないなぁ～」
嫉妬に取りつかれていた幼馴染みが、いつものお姉ちゃんに戻りはじめた。
しかしそれはアルにとって、いいことなのか、悪いことなのか――ランがこうなってしまった以上、自分の口から決定的なセリフを引き出さない限り収まらないことだろう。
（もう、しょうがないよね！　オチンチンがこんな風になっちゃったわけだし！）
少年はそう観念して――あるいは自分に言い訳をして――幼馴染みの軍門に下ることに

した。
「……ラン姉さんみたいな凄いスタイルをしてる女の人に、そんな格好されたら、こうなっちゃうのは仕方ないの！」
勃起理由をその本人に向かって叫ばされ、恥ずかしさの極みである。
しかしそれでも、彼女は許してくれなかった。
「ん～♡　凄いスタイルってどーいうスタイルのことぉ♡」
「だ、だからそれは……ウエストはキュッて括れてるのに、おっぱいだけは凄く大きいっていうか……。ボン、キュッ、プリンというか……」
言葉を口にするたびに顔の赤みが増していく少年とは逆に、年上メイドはその美貌を笑み崩していく。いつの間にか、彼女の大きな瞳から悔し涙も消えていた。
「ローザちゃんよりも凄いよね？　お姉ちゃんの方がおっぱいずっと大きいよね？」
「そ、それは、もちろん……」
一目瞭然である。
「あ～～ん、もう♡　それじゃあ、アルの大好きなこのおっぱいで、お姉ちゃんが、い～っぱい気持ちよくしてあげるね！」
「ふえっ？　あ、あの……おっぱいでっていったい――ってわわわわわっ⁉」
裸エプロン姿のメイド姫が、こちらのパジャマにその手を伸ばしてくる。

反射的に脱がされまいと抵抗したが「ローザちゃんとはしたくせにぃ」とこの時だけは拗ねた口調で呟かれると、やはりその力も緩んでしまう。

「……あ、あうぅ～」

結果、まともな抵抗ができず、丸裸にされてしまった。

「ほらほらぁ。見て、アルぅ♡」

ランはベッドの上で膝立ちの姿勢になると、両手を自らの肩に伸ばした。

そしてエプロンの肩紐を左右に滑らせて――はらり。

彼女の上半身を辛うじて覆っていた白い薄布が下へと舞い落ちる。ただし腰紐はそのままのため、下半身を隠しているエプロンの前垂れはそのままだ。

「うわぁぁ～」

無論、アルの視線はエプロンが折り重なる形になった下半身ではなく、重たげにまろび出た二つの乳房に釘付けだ。

健康的に窪んだ鎖骨から、なだらか曲線を描いて鴇色の頂点へと至り、ピチピチに張り詰めた下乳が、その見るからにズシッとした全重量を弛みなく支えている。

（め、めちゃくちゃおっきいくて……そして、綺麗だ……）

ローザもかなりの巨乳だったが、明らかにそれ以上。

昨夜とほぼ同じ体勢――横になっている自分が相手を見上げている状態――なだけには

っきりとその差を認識できる。見上げる下乳の丸い面積も、乳肉の厚みも重量感も、全てで圧倒的にランの方が上回っていた。
「うふふ♡　このおっきなおっぱいで、い～っぱい気持ちよくしあげるね♡」
「ふぇっ？　って――はうぅん♡」
幼馴染みが急に上半身を倒してきて、いきなりそのバストをこちらの胸に『むにゅん♡』と密着させてきた。
きめ細かでなめらかな乳肌や、その中にたっぷりと詰まる瑞々しい柔肉の感触に、少年の口から思わず甘い吐息が漏れる。
（そ、それにコレって⁉）
たぷたぷとした柔肉の中心にコリッとした小さなシコリを二つ、はっきりと認識できた。ランの乳首だ。これだけガチガチになっているということは、彼女もそれだけ興奮状態にあるということか。
「ッッ～～っっ⁉」
それを踏まえて、見詰めあっている幼馴染みの頬の赤みの意味を想像すると、たまらない気分になってくる。
「ほ～～ら♡　こんなのが気持ちいいんでしょ♡」
そのランの美貌が再びゆっくりと遠のきはじめた。

「ふわわわっ⁉」
バストを強くアルの身体に密着させたまま、彼女が上半身を前後させはじめたのだ。
ランの乳肌がなめらかなため、肌同士をしっかりと密着させたまま擦っているのに、痛みはまるで感じない。彼女の乳肉が持ってる柔らかさと弾力を、己の胸から腹でしっかりと味わうことができている。
「どう♡　お姉ちゃんのフワトロおっぱい♡」
「う、うん。す、すっごく気持ちいいよぉ――っくふぁ～♡」
自信満々に訊ねてくる相手に対し、少年は素直に頷いていた。
「えへへ♡　ローザちゃんのおっぱいよりも、気持ちいいでしょ♡　もっともっと気持ちよくしてあげるね♡」
そんなこちらのリアクションを見て気をよくしたのか、年上メイドの胸奉仕がさらに範囲を広げていく。
――ムニュむにゅずりりン♡　たぷムニュたぷぷン♡
とうとうヘソを越えた辺りまで、豊かな二つの胸が這いずりまわり出した。
「アルぅ♡　もう挟んでいーい♡」
「ふえっ？　は、挟むって何を……」
とそこまで言いかけてハッとした。

何を何で挟もうと言うのか、鈍いアルでもさすがに気づいた。
（パイズリしてくれるってことだ！）
腹にムニュムニュと押しつけられているだけでも、これほどの気持ちよさなのに、さらにこれで性感帯を丸ごと挟まれたら――。
「ッッッッ!?」
その快感を想像しただけで、鼻血を吹き出しそうになってしまう。
「ねぇーぇ、どーなのぉ♡」
ランは悪戯っぽい笑みを浮かべたまま、さらにムニムニと下腹辺りにその豊満な胸を押しつけてくる。
少年はもう辛抱たまらずに、高速でコクコクと頷いていた。しかし――。
「え～？　それじゃぁ、わかんないよぉ」
ランはワザとらしく唇を尖らせてくるが、瞳は完全に笑っている。
先ほど勃起理由を問い詰められた時とノリが同じだ。
どうしても、アルの口からはっきりとした言葉を聞きたいらしい。
「……は、挟んでください」
「えー？　なにぉ？　なにでぇ？」
「ぼ、僕の……その……お、おちんちんを……」

顔を真っ赤にしてそう口にする自分を、ランが嬉しそうに見詰めている。
彼女の母国で弟分の自分をからかっていた十年以上前と、ノリが全く一緒だ。
しかし性別を意識することもなかった当時とは、二人の状況がまるで違う。
（こんなの我慢できるわけないよ！）
彼女は母性を凝縮したような優しい美貌と、牡の獣欲を本能レベルで掻き立てるグラマーなプロポーションに育ち、自分は思春期真っ盛りの男の子である。
「……ラ、ラン姉さんの……そのおっきなおっぱいで挟んでください！」
「あは♡」
はっきりとパイズリをリクエストすると、年上メイドが子供のようにニパッと破顔した。
「いいよぉぉ♡　いっぱい挟んであげるぅ♡　アルのおちんちんを、このエッチなおっぱいで揉みくちゃにしてあげるぅ♡　ローザちゃんのペチャパイじゃ絶対に味わえないぐらい、気持ちよくしてあげるうぅ♡」
真上を向いてそそり立つ男根へ、ランが自らの乳房を脇から掬いつつ向かってきて――。
「はおぉぉう！」
真っ赤に充血していた肉棒が、アッという間にその白い柔肉の中に飲み込まれた。
質量共に強烈な肉悦に股間が襲われて、アルは大きく顎を仰け反らせる。
（凄いよこれえぇぇ！）

男性器全面を、牝の柔肉で隙間なくみっちりと包まれる快感に、目の前が白く明滅する。
「はあぁん♡　挟んだだけでアルのがビクビクッってして、もっと硬くなったよぉ♡」
ランは自らが挟んだペニスの感触を、乳房の内側で確かめるように、両手を軽く揺すり出した。
「っくふぁああぁぁ！　だ、だめっ！　いきなりそんな風にムニムニしちゃだめえぇ！」
その僅かな動きでバストの中に詰まった柔肉がなめらかに流動し、中のペニスにさらなる愉悦をもたらす。
「はあぁん♡　そんなに気持ちいいんだぁ♡」
さらにニコニコ顔になったランが、その行為を止めてくれるわけがない。
「お姉ちゃんをお嫁さんにすれば、こうして好きな時に、このおっぱいに挟めるんだよ♡」
こんなことを言いながら、無邪気に自らの胸を揺すってくる。
――むにゅタプむにゅン！　ムニュたぷたぷッ、ムニュたぷン！
いっぱいに開かれた指の間から白い乳肉を溢れさせつつ、その中心に埋まる男根が執拗に扱き上げられる。左右から脇乳を掴み丸ごと寄せあわせているだけに、特大バストの全重量が中のペニスにギュッと集中しているようだ。
「はあぁぁ！　こんなの気持ちよすぎて、すぐにでもイッちゃうよぉぉ！」
これほど大きなバストでなければ味わうことができないその快感に、少年は再び顎を大

きく仰け反らせてしまう。
「いいよぉ♡　アルが気持ちいいなら、それでいいよぉ♡」
年上の幼馴染みはそんなこちらの姿に満足してか、軽く息を弾ませながらさらに乳房を激しく上下に揺さぶってきた。しかし――。
「……ん？　あっ⁉　だめだめだめだめ！」
ランは何かに気づいた顔になり、慌てて胸から手を離す。
谷間方向に強く寄せられ続けていた二つの膨らみが、ぶるるるん、と元の形に戻った。
「……っくふぁ」
強烈だった股間からの愉悦がやみ、少年の口からは思わず気の抜けた声が漏れる。
（……な、なんで止めちゃったの？）
そのままベッドで横になったままハアハアと息を整えていると――。
「これからが本番だよ」
ランが隣にコロンと横になってきた。
「最後はちゃんと……お姉ちゃんと一緒に気持ちよくなろうね♡」
頬を濃い桜色に染めながら、自らピラッと下半身の前を隠していたエプロンの前垂れを捲ってくる。
「ふわわっ⁉　ま、またいきなり……」

「もー！　なんなのローザちゃん！　また我が儘言い出してぇ！」
「ポーラ様の話を聞いていなかったんですか！　私たちは三人ともアルの妃として認められたんですよ！」
「だからですわ！　……あ、貴女たちまで妃になるのは、まあこの際、致し方ないとして――将来の正王妃になるのはこの私でしてよ！」
「！」「！」「！」
アルも含め、結婚できる喜びで序列のことなど全く頭から飛んでいた。
（……え？　う、嘘でしょ？　やっぱ……一人を選ばなきゃいけないの？）
ランとクラリスもそれを意識してか、急に相手を睨みはじめる。
「アルの一番のお嫁さんになるのは私だよ！」
「何を戯(たわ)けたことを言っているのです！　アルの一番はこの私です！」
「こうなったら誰が一番、アルに気持ちいいご奉仕ができるか、もう一回メイドとなってご奉仕勝負ですわ！　女として決着を着けますわよ！」
「望むところです！」
「それが一番、はっきりするもんね！」
金髪姫の提案に、アルの正王妃にと望んでいる他の姫たちが否と言うわけがない。
（……せ、せっかく皆、仲よくなったと思ったのに……）

がっくりしたアルに、三人の姫メイドたちが我先にと群がってきた。
「ほら、アル！　さっさとおちんちん出して！」
「今度は私がアルをいっぱい気持ちよくします！」
「わっ、ちょっと……わわわわわわっ⁉」
三人がかりでズボンに手をかけられて、あっさりと脱がされてしまう。と。
「……ん？」
「……あらら？」
「……こ、これは？」
剥き出しになったこちらの股間を見て、三人の姫がキョトンとなる。
「アル……どうしたんですの？」
「お姉ちゃんがズボン脱がしてあげたのに、元気ないよ？」
「まさか身体の具合でも悪いのですか？　病気だとか？」
「違うよ！　男はこれが普通なの！」
三人とも、自分が迫れば男は即勃起するものだと勘違いしているようだ。
今の展開でいきなり勃起していたら、そちらの方が問題だと思う。
「わかりましたわ！　それではまずは『フェラ』対決でしてよ！　まずはお口でアルを元気にいたしますわ！」

「いいよ！　アルを気持ちよくすることなら、絶対誰にも負けないんだから！」
「……ふ、ふぇら？　なんですかそれは？」
「ふふふ。さすが小国の田舎姫。本当に無知ですわね。フェラとは殿方のアソコをお口を使って気持ちよくして差し上げることですわ」
「おちんちんをペロペロしたり、チュポチュポしたりするんだよぉ。クラリスちゃんには、ちょっとハードル高すぎるかなぁ～」
ローザとランが性的に無知なライバルに対し、勝ち誇った表情を浮かべる。が。
「口でする、ですか……わ、わかりました！　この前、アルが私にしてくれたようにすればいいってことですね！」
「……え？」
「……この前アルが？」
「はい。この前、アルが私のアソコを口でいっぱい愛してくれましたから」
姫剣士のその発言に、優越感を漂わせていた二人の顔がビギッと強張る。
「……私……アルにそんなことしてもらってない」
「……わ、私もですわ……」
そんなことは当然だ。
なにしろ二人が自分を襲ってきたのだから、こちらから責める展開などありえなかった。

『アァ〜〜ルゥ〜〜』

ランとローザがピッタリと息の合った唸り声で、アルを恨みがましく睨んでくる。

「はうぅん⁉」

そんな険悪な状況のなか、股間から生温かい愉悦が突然迸ってきて、鋭い声を漏らしてしまった。

「んふぅん♡　ご主人さま♡　これで気持ちいいですかぁ――ペロペロペロ♡」

いつの間にかアルの前に跪(ひざまず)いたクラリスが、元気なく項垂れている肉先を舐めてくれている。

たとえ勃起していなくとも、そこは性感帯の塊だ。しなやかな舌が柔らかな肉先を舐めるたびに、背筋がゾクゾクと震えるような快感が走る。

「あーーーー⁉」「クラリスちゃんが抜け駆けしてるうぅぅ！」

出遅れた二人が慌てて跪き、その美貌をこちらの股間に寄せてきた。

「うわっ⁉　なんですかいきなり！　横からぶつかってきて！」

「そんなの邪魔だからに決まっていますわ！」

「アルを一人占めするなんて、絶対に許さないんだから！」

クラリスを二人がかりで突き飛ばすようにして、ローザとランもペニスを舐め出した。

「ちょっと⁉　私のおちんちんを二人とも勝手に――わ、私も！」

そして一旦は横に弾かれた姫剣士も、すぐに横から男根に舌を伸ばしてくる。
「そんな、まさか三人同時に……くふぁあぁ～♡」
正面からローザが、右からランが、左からクラリスが、それぞれ舌をいっぱいに出して肉棒を舐め回してくる。
（こんなのエッチすぎるよおおぉ！）
まだ勃起していない男根が、三枚の美しい桃色舌に絡みつかれてクネクネと踊る。
その光景の卑猥さが半端ではない。
加えて牝舌のしなやかなぬめりや温かさも、ジンワリと股間に染み込んできて、極上の愉悦をもたらす。
「はあぁん♡　急に硬くなってきましたわぁ♡」
「ご主人さまのおちんちんが、すっごく逞しいよぉ♡　レロんちゅん♡」
親指ほどだったペニスが瞬く間に膨張しビキッと剛直。彼女たちの舌の感触をしっかり受け止められるようになる。
「あぁあぁ～。三人の舌がぁねちっこく絡みついてきて、凄く気持ちいいぃ～」
左右のクラリスとランに筋張った竿肌をねぶられるたびに、腰の奥までジワッと染み込むような肉悦が生まれる。先端の小穴をローザにチロチロと舐められるたび尻が愉悦でビクビクと震えてしまう。

「もっと気持ちよくなっていただきますわよ――レロレロぺろレロぉぉン♡」
「ちょっとローザ。私の陣地まで入ってこないでください」
「二人とも邪魔ぁ～。ご主人さまを気持ちよくするのは、お姉ちゃんだけで充分だよぉ――レロんちゅんん♡」
アルが完全に勃起すると、彼女たちのご奉仕争いがさらに激化した。
男根との接触面積を少しでも増やそうと、美しい舌たちがむしゃらに絡みついてくる。
（うわあぁぁぁ！　舌同士であんなにビチビチ競いあってる！）
これぞまさにご奉仕ウォーズ。
一本しかない男根を巡って、三人の姫が己の舌で鍔迫り合いをはじめてしまった。
しかも現実の戦争同様、最もいい場所が一番の係争地となる。
「らめえええ！　三人がかりで先っちょばっかり舐めちゃらめえええ！」
ペニスの根本から亀頭の括れ辺りまでを、縦横に舐め回していた左右の二人が、先端にまで舌を伸ばしはじめた。先走りの汁が小穴から出ているのだろうが、常に三枚の舌が重なりあうようにして舐め続けているため全く見えない。
アルはそのあまりの快感に、頭を掻き毟るようにして身悶えた。
「クッ……ふ、二人とも本当に野蛮ですわね」
そんな中、押され気味なのは正面のローザだった。舌奉仕の勢い自体は負けていないの

だが、小柄なために左右から肩で押されると、どうしても競り負けてしまうようだ。
「こうなったら奥の手ですわ」
その不利を挽回するためか、アルの正面にいる地の利を生かし――パクン♡
肉先をいきなり咥えてきた。
「ああ～♡　ローザのお口の中、とってもあったかくて……ふぁあぁ～♡」
ムワッとした生温かさに亀頭が包まれて、腸から染み出すような甘い吐息を漏らしてしまう。舌だけでも充分気持ちよかったのに、それにプルンと柔らかな唇まで加わって、ペニスにもたらされる快感量がさらに倍増した。
「ああん！　そんなのローザちゃんだけずるい！」
「私もアルを丸ごと咥えて、もっといっぱいご奉仕したいです！」
左右の二人がさらに肩をガツガツとぶつけるようにして、ローザから肉先を奪おうとする。その衝撃に、小柄な金髪姫が亀頭を咥えたまま、睨み返す。
三人の顔付きは、今にも取っ組み合いのケンカをしかねないほど険悪だった。
「もう！　三人ともケンカしちゃダメだよ！　ご奉仕するなら、お祖母様をおもてなしした時みたいに、ちゃんと力を合わせて！」
見かねたアルは、仲が悪すぎるメイド三人を思わず叱ってしまった。
（……あっ。し、しまった……）

今はメイドの格好をしていても、彼女たちは本来我の強いお姫さまたち。
頭ごなしに命令されて、激怒するんじゃないかと不安になった。
しかし三人は一瞬だけ、驚いた顔になった後――。
「はあぁん♡　なんか今のアル、とっても新鮮だったよぉ♡」
「それでこそ、私のご主人さまですわぁ♡」
「アルぅ――いいえ、アルさまぁ♡　言いつけ通りにしますぅ♡」
三人の反応は予測とまるで逆だった。
むしろ自分が珍しく見せたご主人さまらしさ――あるいは男らしさと言うべきか――に恍惚とした顔をしている。
もちろん彼女たちは言われた通り、あからさまな争いを止めた。
肉先はローザが咥えたまま、左右の二人は肉胴部分を舌と唇でねぶり出す。
「うわあぁぁぁぁ！　こ、これ凄すぎるよおおぉ！」
ランがチュッチュッと連続キスをしてくれれば、その逆側をクラリスが唾液が飛び散るほどの勢いで舐め回してくる。
その間、左右から肩で小突かれなくなったローザも口腔奉仕に集中。ツインテールを大きく揺らしながら頭を前後させ、窄めた唇で亀頭全面を磨くようにねぶってくる。
ペニス全面で炸裂するその壮絶な快感に、アルは大きく顎を仰け反らす。

「あああ！　もうダメ！　イッちゃうう！　イッちゃうよおおぉ！」
このままだと精液で汚れちゃうから離れて、という意味で叫んだのだが――。
「ちょうだぃ♡　ご主人さまのザーメンいっぱいお口の中にちょうだぃ♡」
肉先を咥えていたローザが甘くそう呟き、今まで以上の熱心さで肉先を再びむしゃぶり回してくる。
情け容赦ないその口腔奉仕に、絶頂へのカウントダウンがさらに速まる。
「そんなぁ！」「ご褒美をローザちゃんだけが独占するなんてずるいよぉ！」
しかし左右の二人からは、盛大に不満の声が上がった。
アルが切羽詰まった状態だということは彼女たちも強く認識しているようで、再び肩同士をぶつけあい、ケンカをはじめかねない雰囲気になる。
（僕の精液を、三人はご褒美と思ってるの⁉）
その新鮮な驚きと、男としての凄まじい喜びが少年の踏ん張りを強くする。
アルは慌てて絶頂直前のペニスを、三人の口から引き離した。
「ケンカしちゃダメって言ってるでしょ！　ちゃんと三人にご褒美あげるから！　ああ、もうイク！　ほら舌出して！　もう本当にイッちゃうよ！」
切羽詰まったアルの叫びに対し、メイドたちは驚くほど従順だった。
「ご主人さまぁ♡」「ご褒美ちょうだぁい♡」「いっぱい私の舌に浴びせてください♡」

最初はゆっくりだった腰の動きが、瞬く間に速くなっていく。
「あっ♡　ああ♡　凄いですわ♡　はあぁん♡」
ローザは後ろからの衝撃で、その細い首をカクンカクンと揺らしながら喘ぎはじめた。
「あーーん！　もー！　ローザちゃんばっかりずるいよー！」
「ご主人さま！　私も同じメイドとして、ちゃんと平等にチャンスをください！」
そんな二人の熱烈なバックセックスを見せつけられて、左右の二人が抗議の声を上げる。
「それじゃあ次も、先着順で！」
アルは一旦ローザの尻から離れると、粘っこい愛液を滴らせながらランに向かった。
「……そ、そんなぁ」
一番後回しにされたクラリスのがっくりした声を聞きながら、幼馴染みのショーツを横にズラして蜜壺に己をあてがう。自分のペニスがヌルヌルで、相手の牝華もたっぷりと蜜液を滴らせているだけに、進入はとてもスムーズだった。
「んはあぁ……っくふぁぁあぁ～」
ランの喘ぎ声は、初体験の時と同様子宮の奥から絞り出すようなどもり声である。
普段の甘ったるい口調しか知らない他のメイド二人は、その声にやはり目をパチクリさせていた。
（ラン姉さんのお尻、すっごく柔らかくってプリンプリンだぁ～）

下腹に密着した尻の感触に、アルは恍惚と目を細める。
程よい力でしっとりとペニスを締めつけてくる膣襞と同様、年上の幼馴染みはお尻でも、男を柔らかく受け止めてくれる。その下腹に当たる心地よすぎる感触に、少年の口はだらしなく半開きになって無意識に「あぁ～♡」と愉悦の声を漏らしていた。
そうしてじっくりと、ランの感触を堪能してから腰を突きはじめる。
「ア、アルのがズルーってお姉ちゃんの中を擦っていってぇ……んはぁぁぁぁ～♡」
己のペニスの長さ分だけ腰を引いては、根本までズンと突き入れる。
肉感的な丸い牝尻を力強く揺らしながら、性器同士の交わりを存分に味わう。
「ラン姉さんのお尻、たっぷんたっぷんしてて、凄く柔らかくて気持ちいいよぉ♡」
しかも下腹で感じる丸みの感触が、突入の仕方で微妙に変化するため、アルは様々な角度で腰を突いていった。
「んあぁぁ～♡　アルのおちんちんにぃ、お腹の中をぐりんぐりん掻き回されてるみたいだよぉ～♡」
そんなねちっこいセックスに、ランの喘ぎ声がさらに淫靡な籠もり方をする。と。
「……くすん」
この場にそぐわない湿った声が、横から聞こえてきた。
ランの尻を抱きながそちらを見ると、クラリスが土下座のような姿勢でベッドの上でい

じけていた。
（うわあぁぁ！　なんかゴメン！　……で、でも、すっごく可愛い！）
クラリスと言えば、強くて、凛々しくて、クールビューティ。
そんな最強の姫剣士が、白いシーツの上を人差し指でイジイジしながら涙目になって鼻を啜っている。
この強烈すぎるギャップに、男心のど真ん中を撃ち抜かれた。
アルはたっぷり楽しんだランの尻から離れると、膝で歩いてクラリスのもとへ急ぐ。
「ほら、ちゃんとお尻を上げて！　今度はクラリスの番だよ！」
「は、はい！」
土下座の姿勢だった女剣士が、おやつだよ、と言われた子供のようにパッと腰を上げる。
その愚直なまでの健気さに、再び胸の奥がキュンと高鳴った。
「入れるからね！　クラリスの中に僕のおちんちん一番奥まで入れちゃうからね！」
一秒でも早く、この可愛い女の子と一つになりたい。
頭の中をその思いでいっぱいにしながら彼女の尻を抱き寄せて、ショーツを荒々しく横にズラす。そして――。
「んはあぁぁあぁぁぁぁぁン♡」
己の肉先が彼女の入り口を捉えると同時に、一気に腰を突き入れた。

普段の彼女からは想像できない、その鼻にかかったような可愛らしい喘ぎ声に、たっぷりとアルに尻を抱かれてほっこりしていた他の二人が、ベッドの上でギョッとしている。

（二人とも、クラリスと同じぐらい喘ぎ声にはギャップがあるんだけどね！）

アルはそんな二人に見詰められながら、クラリスと完全に一つになった。

「っくぅぅ～」

己を包む膣襞たちの感触に、思わず愉悦の声を漏らしてしまう。

性器同士のぴったり具合は小柄なローザの方が上なのだが、膣の密着感や締めつけの強さはクラリスの方が優っている。

お尻のボリュームもランの方が上なのだが、クラリスの方がより弾力感がある。実際の大きさはランの方が上でも、腰を突いた際に感じる反発力はクラリスの方が優っていた。

「あああ！　いいよ！　クラリスのお尻、たまんないよぉぉ！」

そのためこちらが腰を突けば突いただけ、心地よい衝撃がペニスにも下腹にも跳ね返ってくる。

――パンパンパンパンずぱぱぱパン！

結果、二人の肉がぶつかりあう乾いた音の間隔が、瞬く間に狭くなっていく。

「凄いですぅぅぅ！　ご主人さまのが後ろからズンズン入ってきてええぇ、喉の奥まで届いているみたいですぅ！」

「あああ！　クラリスのお尻も凄く気持ちいいよぉぉ！　キュッて締まっているのに柔らかくって、腰の動きを止められないよぉぉ！」
熱烈に交わりあうそんな二人を見て、ほっこりしていた他の二人がその女体を慌てて起き上がらせた。
「もうクラリスちゃんの順番は終わりだよ！　今度は前からご主人さまのおちんちんを私の中に入れてええ！　――ってローザちゃん邪魔！」
ベッドの上で横になり自ら脚をM字に開いてアルを誘おうとしたランの上に、ローザが覆い被さる体勢を取る。
「これもご奉仕競争の一つでしてよ！　これみよがしに大きな胸をアピールして！」
そんなやり取りをしている二人の下半身が、こちらからは丸見えだ。
（二人とも、アソコをあんなに濡らして僕を待ってる！）
アルはクラリスとの結合を解くと、今度は折り重なる彼女たちの方へと向かっていった。
「だから、貴女はいつもマイペースで――んはぁぁん♡」
いつもの高飛車口調でランにダメ出しをしていたローザが、再び可愛らしい声で喘ぐ。
「ええっ⁉　またローザちゃんからなんてズルい――っくぁぁぁ～♡」
続けて下のランも、肉悦の籠もった喘ぎ声を絞り出す。
「ケンカしちゃだめって言ってるでしょ！　ちゃんと、みんな可愛がってあげるから！」

アルは官能の汗を飛び散らせながら、上下に並んだ二つの蜜壺を交互に何度も貫いた。
（二人同時にセックスすると、アソコの中が全然違うのがよくわかるぅ！）
蜜壺のサイズが小さくアルにジャストフィットするローザと、牝肉がたっぷりと詰まっているような感覚でムギュッと男根を押し包んでくるラン。しかしどちらに入れても、眉間に突き抜けてくるような強烈な肉悦が迸ってくる。
――ヌチュぐちゅくちゅん！　ズンパンパンぱぱパン！
アルは二人の蜜壺を何度も往復し、その抱き心地の違いを存分に味わった。
「次は私でしてください、ご主人さまぁ♡」
そこにクラリスが、後ろから抱きついてくる。
ご主人さま、ご主人さまぁ、と蕩けるような甘い声で囁きながら、チュッチュッと首筋にキスをされて、セックス中にもかかわらず意識がそちらに向いてしまう。
「もー！　クラリスちゃんがまたいいところで横取りするー！」
「貴女、キャラが今までと違いすぎますわよ！」
重なりあう二人の抗議に構わず、アルはクラリスと見詰めあったまま、今度は正常位で一つになった。
（あぁあぁ～♡　クラリスの中も、やっぱりめちゃくちゃ気持ちいいよぉ～♡）
彼女の最深部を突くたびに、男根をキュンキュンと切なそうに絞り込んできて、肉体的

にも精神的にも極上の快感をもたらす。
「はあぁあぁん♡　好きですぅ♡　私はご主人さまのことが大好きですうぅ♡」
しかもクラリスの両手が悩ましげにこちらの背中を掴み、濡れた瞳で切なそうに見詰めながらこんなセリフも連呼してくる。
「ああぁぁ！　僕もだよ！　僕もクラリスのこと大好きだよおぉ！」
心身共に昂ぶった少年は、激しく姫剣士を貫きながら、思いっきり唇を重ねていた。
「あー！　クラリスちゃんだけラブラブモードでズルいー！」
「ご主人さま！　私の方がもっともっと、もぉぉぉぉぉっと愛しておりますわ！」
結局、姫メイドたち三人に乞われるまま、次々と身体を繋げていくことになった。
正常位で思いのままランの巨乳を揺らしてから、立ちバックでクラリスの引き締まった尻を存分にパンパンと鳴らし、座位でローザと見詰めあったまま互いに腰をくねらせる。
体位を変えて新たな女性器に男根を埋めるたびに、新鮮なセックスの快感が小柄なアルの全身を駆け巡った。
「あああぁぁぁぁぁ！　もう、イキそう！　もうイッちゃいそうだよおぉ！」
これほど極限の快感に晒され続けていては、さすがに三度目でも限界だ。
「ご主人さまぁ！　私の中に出してくださいぃ！」
「お姉ちゃんの中にた〜〜っぷり、ぶちまけちゃってぇぇぇぇ！」

「ご主人さまの高貴な子種は、最も高貴な子宮で育まれるべきですわああ！」
連続セックスで官能の汗まみれになっている三人が、同時に膣内射精を求めてくる。
（うわああぁ！　ど、どうしよう！）
そういえば、これは正皇太子妃を決めるためのセックス勝負でもあった。
美しい姫メイドたちを抱きながら、アルは決断を迫られる。
本音を言えば三人全ての中でイキたいが、男性器は当然一つしかない。
「あああぁぁあああぁあああぁ！」
アルは正常位で抱いている最後の相手を、痙攣にも似た小刻みな突入で突きまくってからズルンとペニスを引き抜いた。
そしてとても一人に決めきれない男根を掴み、ベッドの上でいまだにメイド服を着たままの三人にそれを向ける。
「このままイクよ！　ローザも、ラン姉さんも、クラリスも！　みんな僕の一番大切なお嫁さんだからあぁぁ！」
アルはそう絶叫すると同時に、全身を息ませた。
――どぷどりゅ、ドプドプッ、どぎゅどぷどぷン！
肉先から弾き出された精液は、ローザのきめ細かな肌に弾け、ランの豊かな乳房に粘りつき、クラリスの端正な美貌を盛大に汚した。そして――。

「はあぁぁぁん♡　アルの熱いのかけられてイッちゃうぅぅ！」
「ご主人さまああぁぁぁ！」
「イクっ！　私もイッてしまいますううぅ！」
連続セックスで彼女たちの官能も、ギリギリまで追い詰められていたようだ。
自らアソコを激しく慰めながら、アルのザーメンを浴びて三つの女体が激しくくねり、
――ぶしゃややぁぁ！　ぷしゃぁぁ！　ぷしゃぁぁぁぁぁ！
彼女たちも盛大に絶頂液を噴き出した。
（うわぁぁぁぁ！　みんなイッちゃってる！　僕にぶっかけられて、三人ともあんなに全身をビックンビックンさせてイッちゃってるぅぅぅ！）
その卑猥極まりない光景を恍惚と眺めながら、アルは三回目とは思えないほど大量のザーメンを吐き出した。
そして文字通り精根尽き果てると、アルはそのままベッドの上に倒れ込んだ。
大の字になって、そのままうっとりと瞼を閉じて余韻に浸る。
しかし――レロン♡
全てを絞り出した男根から、再び生温かな愉悦が迸ってきて「はおぅ⁉」と気の抜けた声が漏れた。
驚いて閉じていた瞼を開けると、精液の残滓を肉先から滴らせている男根に、メイドた

ち三人がその美貌を寄せていた。
「んふぅうぅん♡　ご主人さまぁ♡」
「最後のお掃除をするのも、私たちメイドの仕事だよぉ♡」
「お情け、ありがとうございましたぁ♡」
「っひゃぁ!?　っふあぁぁあぁ〜♡」
イッた直後で敏感なペニスを三人がかりで口で綺麗にしてくれる。
「あ、ありがとう。もう綺麗になったから……っふあぁ!?」
しかし彼女たちのご奉仕は、それだけでは終わらない。お掃除フェラの範疇を明らかに超えた熱心さで、ぐったりしているペニスをねぶり続けてくる。
「それでは四回戦ですわね」
「ご主人さまが、ちゃんと一人を決められるまで終わらないよぉ♡」
「明日の朝まで時間はたっぷりありますからね♡」
「ふえぇ!?　あ、明日の朝って……まだ夕方にもなってないのに――くひゃあ!?　ら、らめぇぇ！　あああぁ！　そこはもうらめえぇぇ！」
姫メイド三人によるご奉仕ウォーズは、一晩中続くことになった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!